

茨城県稲敷郡江戸崎町

山 崎 塚 群

2004

山崎遺跡調査団  
江戸崎町教育委員会

## 発刊に寄せて

江戸崎町は、古い歴史と伝統があり、古代の貝塚や古墳、中世の城跡、創建の古い神社や寺院、古文書など多くの歴史的遺産を今日に伝えました。

この度、有限会社塙口建材興業の土砂採取事業にともない山崎地域の開発許可の中請がありました。この地域には、埋蔵文化財包蔵地分布調査において発見された古墳群である山崎古墳群があり、本書はその調査報告書です。

この調査は、江戸崎町教育委員会が山崎遺跡調査團に発掘及び整理調査を依頼し、実施されたものです。平成13年8月20日からの確認調査の過程で、4基の「古墳」はいずれも後世の「塚」であることが判明し、「古墳群調査」から「塚群調査」へと内容を切り替え発掘が進められました。その結果、縄文土器・土師器・手捏土器、銅鏡などが出土しました。それらは、価値のある遺物であり、塚の構築時期を考える上で参考となります。

開発と生活様式の急激な変化によって、ややもすると忘れられるがちな昔の人々の生活を語ってくれる貴重な遺跡が明らかになり、歴史や文化研究の資料に加えられたことは、大きな朗報です。これを契機に、文化財への認識が深まり、同時に郷土を愛する心が培われれば幸いです。

最後に、本書をまとめるにあたり調査・整理・編集に多くの方々の御協力と御支援を賜りました。心から敬意を表し、発刊の言葉と致します。

平成16年10月

江戸崎町教育委員会

教育長 浅野恒雄

## 例　　言

1. 本書は、有限会社笠口建材興業の土砂採取事業に伴い事前調査が行われた、茨城県稲敷郡江戸崎町大字蒲ヶ山字山崎に所在する山崎塚群（旧山崎古墳群）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は江戸崎町教育委員会の指導のもと山崎遺跡調査団が行った。
3. 遺跡は、江戸崎町埋蔵文化財包蔵地分布調査において、古墳群として周知されていたが、発掘調査の結果、塚群であることが判明した。本書では記述にあたり山崎塚群の名称で統一した。
4. 遺跡の名称・所在地・種別・面積・調査期間・調査組織は下記の通りである。

遺　跡　名　　山崎塚群（旧山崎古墳群・町遺跡番号161）  
所　在　地　　茨城県稲敷郡江戸崎町大字蒲ヶ山字山崎174-1  
種　別　　塚  
面　積　　2.125m<sup>2</sup>  
調　査　期　間　平成13（2001）年8月20日～平成13年9月27日  
調　査　組　織　山崎遺跡調査団  
　　調　査　団　長　　平岡和夫（山武考古学研究所）  
　　調　査　担　当　者　　間宮正光（　　タ　　）  
　　調　査　員　　土生朗治（　　タ　　）

5. 本書の執筆は、Iを平田満男（江戸崎町教育委員会）が、II・III・IV・V・VIは平岡和夫と間宮正光が担当し、編集は平岡と間宮が行った。
6. 調査に係わる図面・写真・遺物等の資料は報告書刊行後、一括して江戸崎町教育委員会が保管している。
7. 発掘調査において下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜った。（敬称略、順不同）  
諸星政得　折原　繁　根木時子　本田利子  
㈲笠口建材興業　江戸崎町文化財保護審議会　㈲江戸崎町シルバーハウスセンター  
㈲新成田総合社　開成測量㈱

## 凡　　例

1. 本書で使用した地図は下記の通りである。  
第1図 国土地理院発行 1/50,000「佐原」  
第2図 江戸崎町発行 1/10,000「江戸崎町都市計画図」  
第3図 江戸崎町発行 1/2,500「江戸崎町都市計画図」
2. 遺構実測図中における方位は座標北を示し、土層断面図などに記した数値は標高を示している。
3. 本書の挿図の縮尺は下記の通りである。  
塚況況図 1/200　　塚平面図 1/120　　塚断面図 1/120  
遺物実測図　土　器 1/3　　古　銭 1/2
4. 出土遺物の注記は右の通りである。　　例　江戸崎町山崎塚群第1号塚　エヤツ-1
5. 図中で使用したスクリントーンは、その都度明示してある。

## 目 次

発刊に寄せて

例 言

凡 例

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 塚群の立地と分布	2
IV 調査の方法と経過	3
V 塚の調査	4
VI まとめ	11
抄 錄	

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置図

第2図 調査区域図

第3図 山崎塚群の分布図 ..... 2

第4図 山崎塚群現況図 ..... 折図

第5図 1号塚 ..... 5

第6図 2号塚 ..... 6

第7図 3号塚 ..... 8

第8図 4号塚 ..... 9

第9図 1・4号塚出土遺物 ..... 10

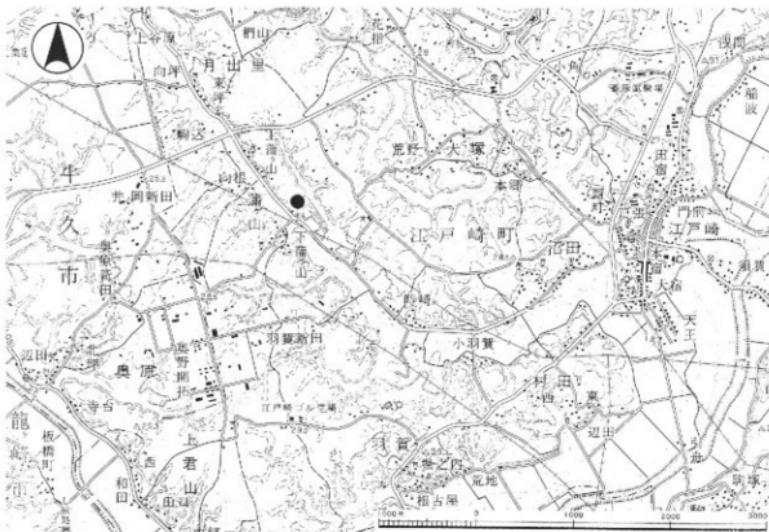
## 表 目 次

表1 出土遺物観察表 ..... 10

## 写真図版

図版1 1・2・3号塚全景	
1・2・3号塚土層断面	
図版2 1号塚調査前現況	
1号塚土層断面(1)	
1号塚土層断面(2)	
図版3 2号塚調査前現況	
2号塚土層断面(1)	

2号塚土層断面(2)	
図版4 3号塚調査前現況	
3号塚土層断面(1)	
3号塚土層断面(2)	
図版5 4号塚調査前現況	
4号塚土層断面(1)	
4号塚土層断面(2)	



● 遺跡の位置

第1図 遺跡の位置図



■ 調査区域

第2図 調査区域図

## I 調査に至る経緯

平成12年11月17日、有限会社豊田建設から江戸崎町教育委員会宛に、茨城県稲敷郡江戸崎町大字蒲ヶ山字山崎174-1の山林について砂利採取計画と、それに伴う埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会が出された。照会のあった計画地は、平成12年に実施された江戸崎町埋蔵文化財包蔵地分布調査によつて4基の古墳の所在が確かめられ、山崎古墳群と名付けられた周知の遺跡であった。このため教育委員会では埋蔵文化財の取り扱いについて早急に対応を図ることとなり、12月11日に江戸崎町文化財保護審議会を開催した。審議会は、計画地は周知の遺跡であり、4基の古墳の所在が確認されているので事前調査の必要性があるとの結論に至った。この指摘を受けて教育委員会は、12月22日、事業者に別途協議が必要である旨回答した。平成13年1月、事業者と教育委員会との間で、事前の発掘調査をも含めた、今後の開発計画と見通しについて協議が重ねられた。2月末に至り、調査対象地を区分けすること、事前の発掘調査を実施して記録保存の措置を図ることで事業者の同意が得られた。

一方、茨城県教育庁文化課文化財係の指導と助言を受け、山武考古学研究所の協力を得ながら「山崎古墳群」についての遺跡の発見、登録、周知化の手務を進め、同時に調査の準備と事業者協力による樹木伐採工程の調整を行つた。7月、茨城県へ埋蔵文化財発掘調査の届出を提出した。8月1日から9月30日まで発掘調査を実施することとし、現地での調査を進めたところ、4基の古墳はいずれも後世の塚であることが判明した。これにより急速古墳群調査から塚群調査へと調査内容を切り替え、9月末に調査を完了した。

## II 遺跡の位置と環境

### 位置

山崎塚群は茨城県稲敷郡江戸崎町大字蒲ヶ山字山崎174-1に所在する。この地点は江戸崎町役場の西北西約3.8kmの平地林中にあたり、地理上では北緯35度57分、東經140度17分に位置している。江戸崎町は茨城県の南部に位置し、東は桜川市、東町、西は龍ヶ崎市、牛久市、南は新利根町、北は阿見町、美浦村に接する。町の西部を小野川が貫流し、霞ヶ浦に注いでいる。産業は農業を主体とし、面積52.79ha、人口20,883人、世帯数6,920戸を数える。町内の地形形成は第四紀リス・ウルム氷河期にまで遡る。同期の古東京湾底には成田層が堆積し、後に陸化する。この層の上部に富士・箱根等の火山灰、関東ローム層、黒土層が順に堆積して現在の地形が成立した。洪積台地面は小野川、沼里川などの大小の河川によって浸食され、北縁部は霞ヶ浦の広大な低湿地に接している。

### 歴史的環境

平成10~11年度に実施された埋蔵文化財包蔵地分布調査と、新規発見の遺跡を加えた江戸崎町内の周知の遺跡は、現在161ヶ所の所在が確認されている。町域の塚の分布を概観すると駒塚・松山・上君山・古渡・大塚・月出里・沼田・江戸崎・椎塚・苗ヶ山などの地区に所在することが確認される。塚はいずれも台地上に立地する傾向を示し、塚は単独に所在するものと群を構成するものがあり、周辺の古墳群中には古墳を後世に塚として再利用したものが認められる。

塚は1基のみ所在するものとしては犬塚・新畠塚・赤羽根塚・沼田庚申塚・原大日塚・中峯大日塚があり、複数で群を構成するものとしては山崎塚群が、古墳を塚として再利用した可能性のあるものを含めると姫宮古墳群1号墳・大日峯古墳・大塚山古墳などがある。

### III 塚群の立地と分布

#### 立 地

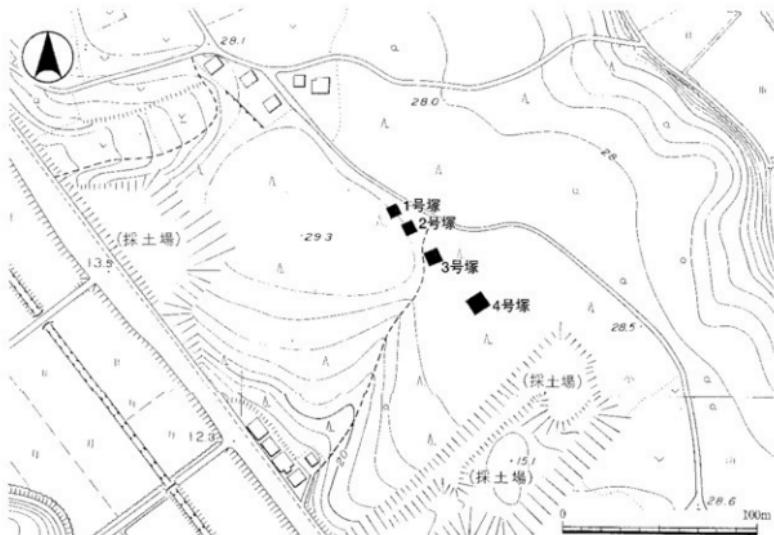
遺跡は、霞ヶ浦に注ぐ小野川の支流、沼里川左岸の洪積台地上に立地している。この台地は、標高29.3mを測り、北西-南東方向に細長く延びて行く。台地の南西側を流れる沼里川は、遺跡付近で幅約105mの谷を形成し、ゆったりと南東流する。台地の北東側には北西行する支谷が形成され、宇下浦ヶ山から字上苗ヶ山まで約50mの幅を保ちながら遡行している。両谷の間に残されているのが塚群の所在する台地である。

遺跡の立地する台地は幅260m、長さ1.7kmの南に狹まる長三角形を呈した台地であり、頂部はなだらかで、南西側の沼里川に面した斜面は緩傾斜、支谷に面した北東側は急傾斜となっている。谷底にあたる水田面との比高差は17mを測る。平成13年の時点では、調査区南東側の隣接地に採土場が設けられており、境界には急峻な崖が形成されていた。

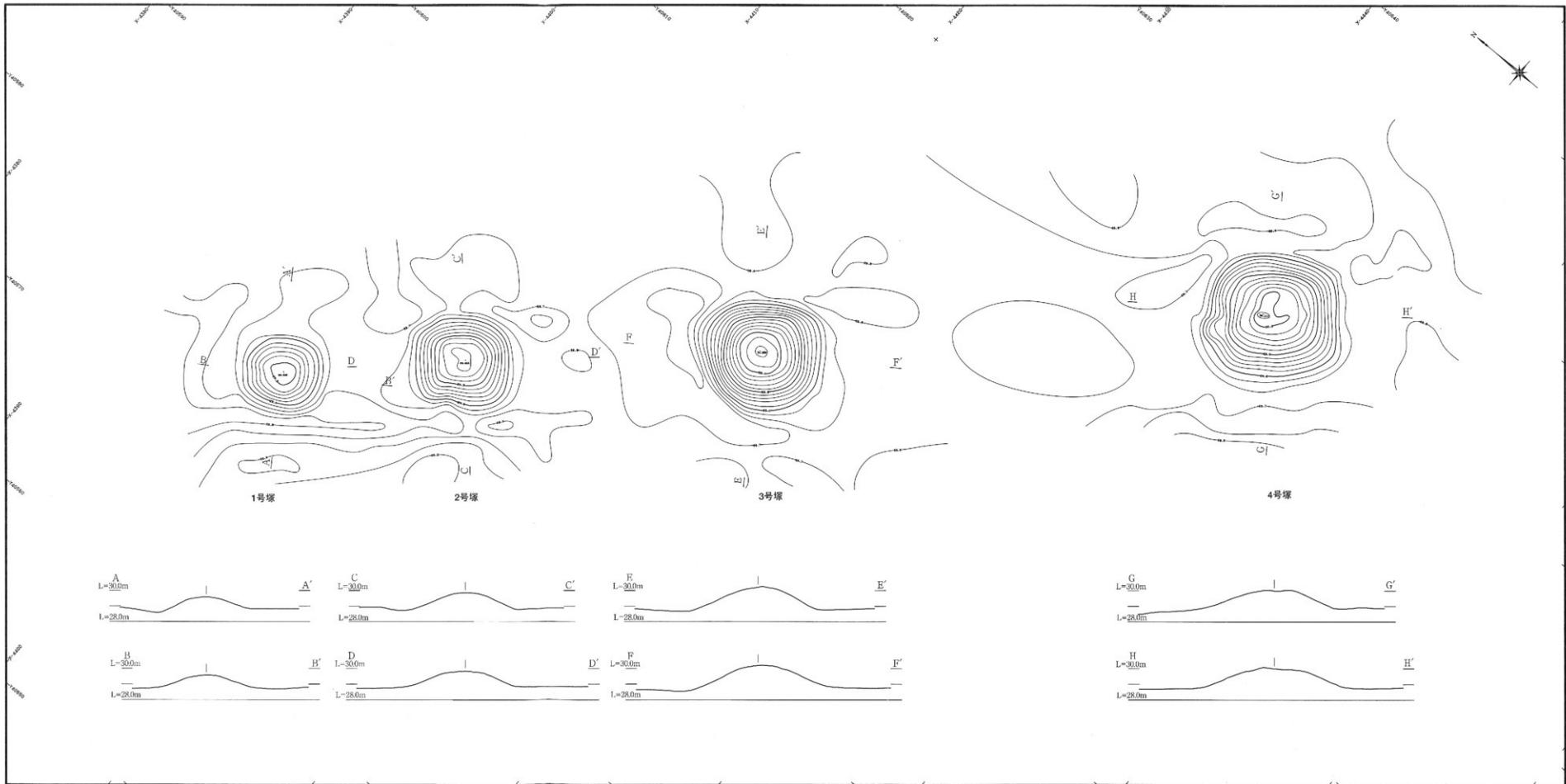
#### 分 布

調査対象地には尾根上を走る農道に沿って4基の塚が所在する。平成12年度に調査された埋蔵文化財包蔵地分布調査によって、西側の小型塚を1号塚とし、順に4号塚までの名称が付されている。

塚群周辺の地形を観察すると、北西-南東方向にはほとんど同高度のまま延びて行く尾根は、調査地付近で北東側へと大きく曲げられている。これは沼里川から進入する幅広い支谷の谷頭にあたるためで、浸食によって最高所が西と東の2地点に分離されている。この西の高所に1・2号塚が、東の高所に3・4号塚が築造されている。



第3図 山崎塚群の分布図



第4図 山崎塚群現況図 (S=1:200)

## IV 調査の方法と経過

### 調査の方法

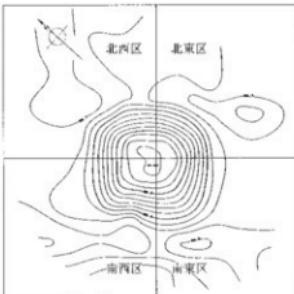
調査は塚4基を対象に行った。調査に先立って塚の現況測量を行う。等高線測定法はレベルによる10cm間隔の標高点測量（直接測定法）を行い、標高点をトータルステーションシステムにて角度・距離を測定し、縮尺1/100の塚測量図を作成した。

現況測量の結果、塚の平面形は方形を基調としていることが判明した。塚頂部を基点として4分割線を設定し、この分割線に沿って幅60cmのベルトを残した。これにより4分割した区域を、北東・北西・南東・南西の名称で区分した。

塚の封土は表土を除去し、その後全体に掘り下げて地山面（ソフトローム層）まで確認して、調査を終了した。封土の構築状況・断面実測図は縮尺1/20で作成した。

写真撮影は6×7判モノクロ、6×4.5判カラー、35mmモノクロ、カラーリバーサルの各フィルムを使用し、適時行った。

整理調査は、発掘調査によって得られた資料を対象に行った。



塚分割概念図

遺物の整理作業は洗浄・注記・接合・実測・トレースの順で進めた。土器の注記にはインクジェットプリンターを用い、実測は古銭・土器とともに掲載が必要と考えられるものを原寸で実測し、遺構原図については図面修正を行った後、墨入れを行った。

### 調査の経過

発掘調査は平成13年8月20日より同年9月27日までの間、現地調査を行った。

#### 日誌抄

- 8月20日～31日 調査を開始する。調査に先立って現況測量を行う。
- 9月3日 1・2・3・4号塚の調査前の現況写真を撮影する。各塚の土層観察用ベルトを設定する。
- 9月4日 3・4号塚の調査を開始する。3号塚は封土の南東・南西区より、4号塚は全体の表土除去作業を行う。4号塚の南東区表土より古銭「文久永寶」が出土した。
- 9月5日 3・4号塚の調査を継続する。3号塚は北東・北西区の表土除去、4号塚は封土の掘り下げを行う。3号塚の南東区、4号塚の南西区より土師器片が出土した。
- 9月6日 3号塚は北東・北西・南西区、4号塚も共に封土の掘り下げを行う。北東区の旧表土と思われる黒褐色土層の下層より古墳時代中期（4～5世紀）の土師器（壺片）が出土した。南西区封土下層より土師器壺片（7世紀）が出土した。
- 9月7日 2・3・4号塚の調査を行う。2号塚の表土除去。3・4号塚は封土の掘り下げを行う。旧表土面にて焼土を確認する。
- 9月13日 1・2号塚は封土の掘り下げ。3・4号塚は封土の堆積状況を把握する。
- 9月14日 1号塚は封土の掘り下げ。1・2号塚封土の堆積状況を把握する。1号塚の封土下層より手握土器1点、4号塚の封土下層から古墳時代土師器の壺片が出土した。
- 9月17日 1号塚から4号塚の封土外周部分の表土除去作業を行う。
- 9月18日 1・2・3号塚の封土の掘り下げを行う。1号塚の南西区より绳文式土器片が出土した。

- 9月19日 4号塚の封土の掘り下げが地表面に達し終了する。1・2・3・4号塚封土の堆積状況の土層断面実測を行う。
- 9月21日 1号から4号塚の堆積状況の写真を撮影する。塚周囲の造構の有無を確認するため精査する。遺構無し。
- 9月22日 1・2・3号塚の西側ベルトを外す。封土の構築状況の写真撮影及び断面実測を行う。
- 9月25日 3・4号塚南東側の断面を写真撮影する。
- 9月26日 発掘器材の撤去作業を行う。
- 9月27日 江戸崎町教育委員会に調査概要書、遺物発見届等の関係資料を提出し、現地での発掘調査を終了する。

## V 塚の調査

### 1号塚

台地の西側頂部に立地し、最西端に位置している隅丸方形の小型塚である。南北6.0m、東西5.8m、高さ0.95mの規模を有している。遺存状態の良い北東辺で計測すると、主軸はN-32°-Wを示し、やや西偏する。

塚の裾部は直線状に成形されているが、中央部分がやや張り出しがみとなり、両部は弧状に整えられている。塚の頂上部分は方形を意識しているものの、西南側が大きく崩れ、全体として略円形を呈する。塚の封土は四角錐状にしっかりと成形されており、南東、南西、北西辺ではほぼ原形を保ち、一方、南西辺のみがやや張り出しがみの弧状となっている。塚の中腹には段が設けられていない。周溝は認められず、周囲に平坦面が形成されているのみである。

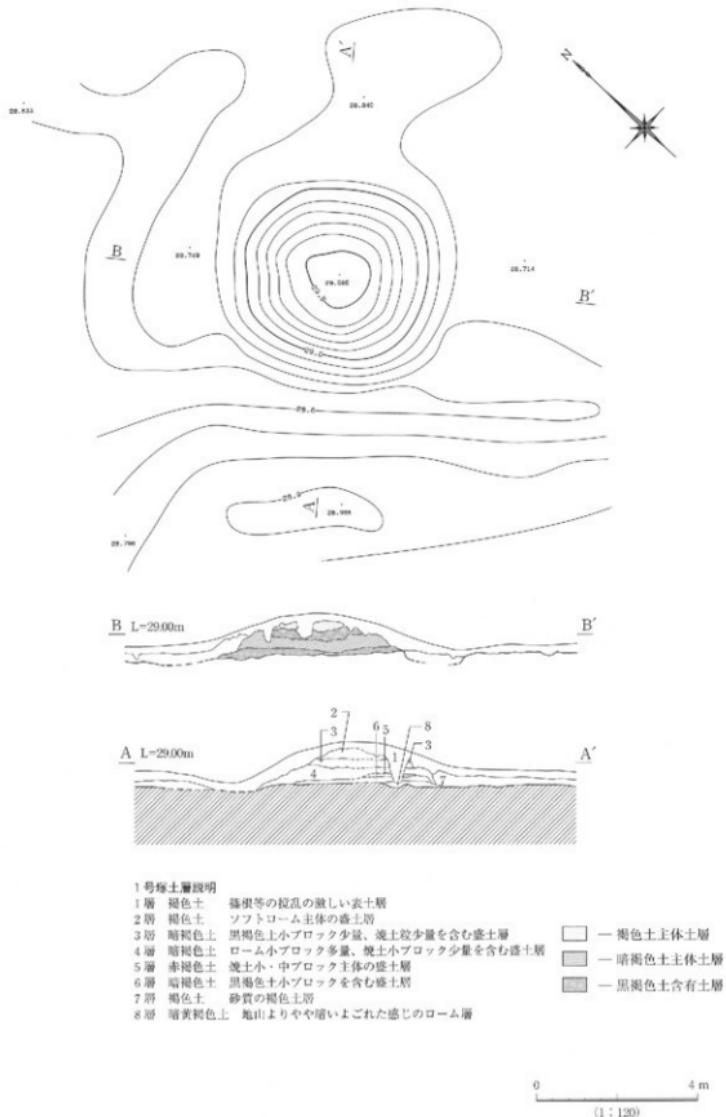
塚の頂部を通り、各辺に直交する軸線を設定して封土層の観察を行った。それによれば本塚は、地山のローム層を若干の凹凸はあるもののほぼ平坦に削平し、直上に5層の上層を盛り上げて構築したものである。盛り上の最下層となる第6層は黒褐色土を含む暗褐色土層であり、かなりの縮まりが認められた。一種の叩き締め作業を加えているのかもしれない。この上部に褐色、暗褐色の土層が互層状態では水平に積まれている。最下層の上に積まれていた第3～5層には焼土粒子が混入されている。その場で火を焚いたというよりも、盛り土層中に混入された、あるいは盛り土面に散布されたというような状況を示す。

また、塚の北東方向には砂質の褐色土からなる第7層が長く延びているが、これは塚構築時に台地頂部方向より上砂を撒入した痕跡と思われる。同様に、塚の南東辺付近に汚れたローム層の充填された落ち込みが発見されたが、塚とは関係ない別の遺構である。

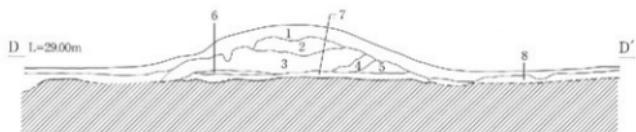
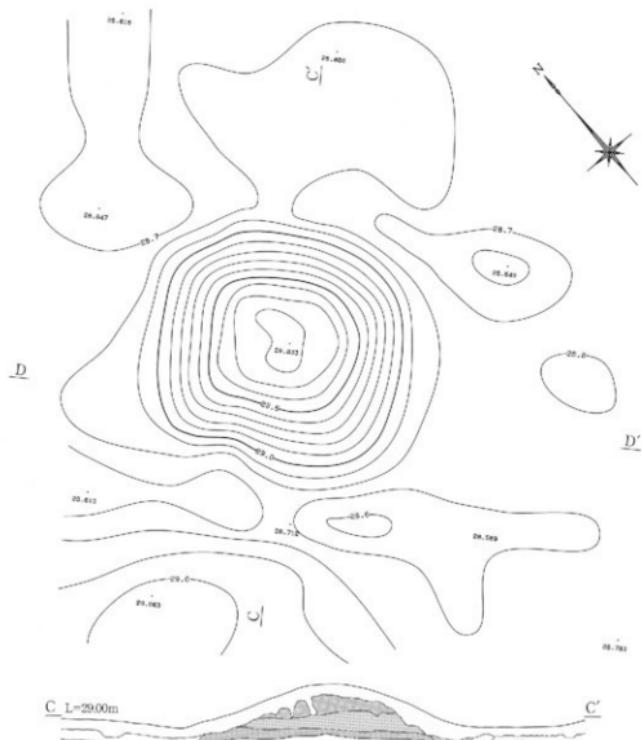
### 2号塚

台地の西側頂部に立地し、1号塚に隣接する隅丸方形の中型塚である。南北7.3m、東西6.6m、高さ1.0mの規模を有している。遺存状態の良い北東辺で計測すると、主軸はN-41°-Wを示し、西偏する。

塚の裾部は直線状になり、中央部の張り出しあほとんど認められない。隅部は弧状に整えられ、塚の裾部から頂上部にかけて完全な方錐状に成形される。頂上部分には攪乱があり、最上段の北西側半分を抉り取っている。削られた封土は西隅部に移動されたらしく、この部分の等高線が外側に強く変形する。裾部の南西辺には削痕が認められ、これは抜根等によるものであり、塚裾部を半円形に抉り取っている。塚の中腹には段が設けられていない。周溝は認められず、周囲に平坦面が広がっているのみである。



第5図 1号塚



2. 普通土質說明

- 2号 暗褐色土 稲根等の棍叢表土層  
 2号 暗褐色土 ローム軟土・ローム小ブロックを少量含む透水層  
 3号 暗褐色土 ローム・褐色土小ブロック中量、幾ら小ブロック少量含む透水層  
 4層 褐色土 土壌層  
 5層 褐色土 土壌層  
 6層 褐色土 土壌層  
 7号 暗褐色土 黑褐色土・暗褐色土小ブロックがほぼ均質に混じった旧表土層か  
 8号 褐色土 砂質の褐色土層

■ — 暗褐色土主体土层  
■ — 黑褐色土含有土层

A horizontal number line starting at 0 and ending at 4 m. There is a tick mark at 1.20.

第6図 2号墳

塚の頂部を通り、各辺に直交する軸線を設定して封土層の観察を行った。本塚は、地山のローム層の直上に6層の土層を盛り上げて構築している。地山のローム層は、台地の傾斜に平行する北西-南東方向ではやや凹凸が見られるものの、傾斜に直交する南西-北東方向ではほぼ水平に削平がなされていた。この地山面上に第7層が載る。最下層の第7層は黒褐色土と暗褐色土が均等に混じった土層であり、旧表土を主体とする層とも考えられるものである。この上に焼土粒子を含む暗褐色土の第3層が盛られている。第3層は詳細に観察すると、北東側から塚の内部に向かって3度に分けて盛り上げられていることが判る。この現象は、本塚のこの部分でのみ観察されたもので、他では確認できなかった。また、焼土粒子の状態も火を焚いた痕跡とは考えられないものである。塚の南西側には砂交じりの褐色土が長く延びているが、これは後世の溝状の擾乱に伴うものと解釈した。

### 3号塚

台地の東側頂部に立地し、2・3号塚に隣接する隅丸方形の大型塚である。南北8.3m、東西7.4m、高さ1.3mの規模を有している。遺存状態の良い北東辺で計測すると、主軸はN-34°-Wを示し、西偏する。

北東・南東辺では裾部の直線が良く残り、南西・北西辺では変形が強く裾部が円弧状になる。塚は方錐形を意識して成形されているが、南西・北西側の丘部では円墳状の形状を呈している。このような形状が築造時の原形のままなのか、封土が流出した結果なのか不明な点が多い。頂上部分は方形の広い平坦面となっており、築造時の原形を良く保っている。塚上に擾乱は認められない。塚中腹の段及び周溝は認められず、周囲に平坦面が広がっているのみである。

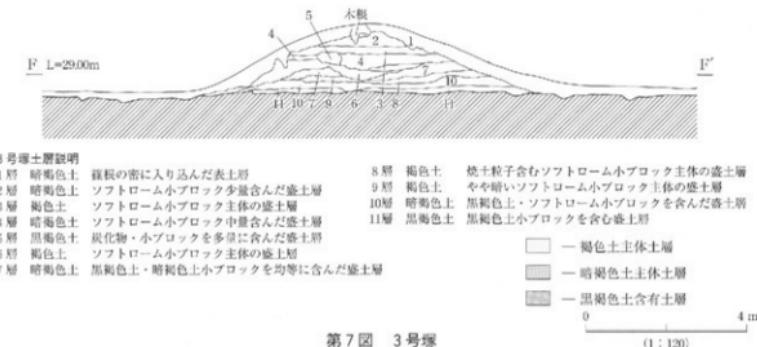
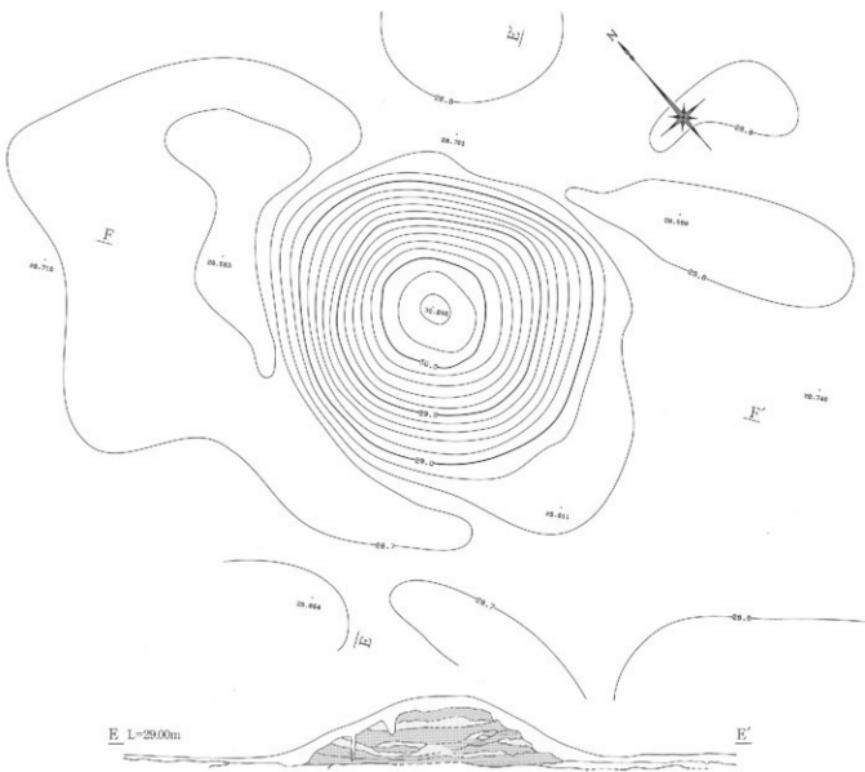
塚の頂部を通り、各辺に直交する軸線を設定して封土層の観察を行った。本塚は、大型塚のためか地山上に10層の土層を盛り上げて構築する。地山のローム層は全体的に平坦に仕上げられ、この直上に第11層が盛り上げられている。この層は柱粒状の黒褐色土層で、元は旧表土層と考えられるものである。しかし、塚北東縁の堆積状況から見ると自然堆積状態のまま掘り残したとは考えられず、一度移動したもの再度堆積させたものであろう。かなりの叩き締めを行っており、硬質である。これより上方の封土は褐色土層と暗褐色土層との互層状態に積み上げられている。しかも塚の高さの約1/2に達する第10層から第7層までの間では、各上層が塚の円周側から中心に向かって内傾するような逆勾配状態に積まれている。しかもこの土層はF-F'方向で見る限り、F側から投入された後はF'側からというように交互に逆方向から入れられるという特徴を有し、第7層より上ではほぼ水平の堆積状態となっている。逆勾配状態の盛り土は塚の外周線に沿いながら上方へと積み上げられ、しだいに高度を稼いでいくという特徴を持っており、このような工法は古墳の模様でも見ることができる。焼土粒子は逆勾配状態の中心にあたる第8層で認められる。高さでは塚の基盤より約1/3ほど上方、平面的には塚のほぼ中心部にあたる部分である。

塚の裾部から北東方向に褐色土層が延びているが、これは台地頂部からの土砂搬入の痕跡であると考えられる。

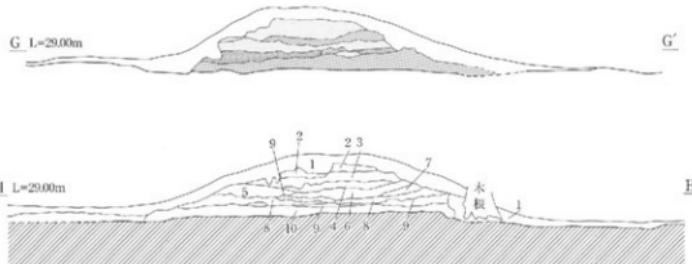
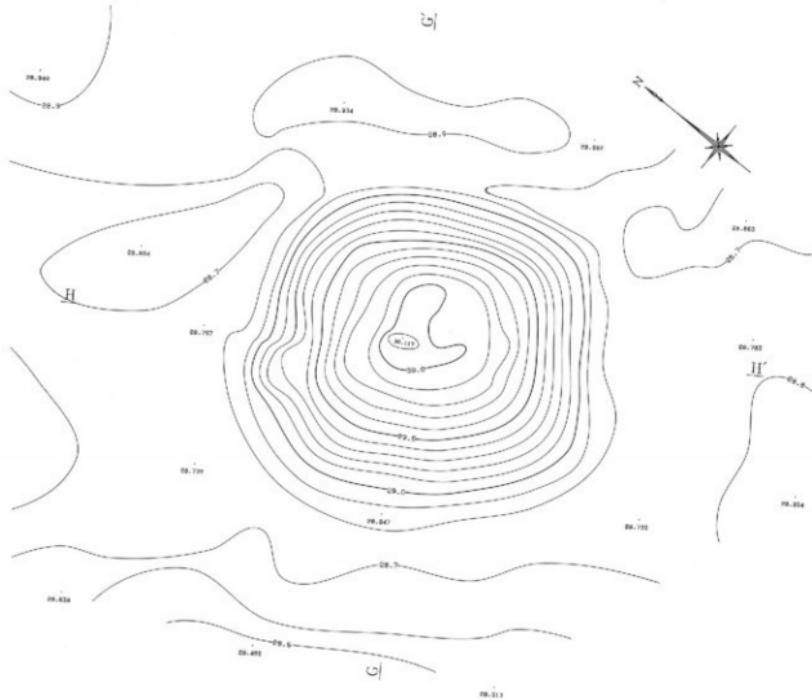
### 4号塚

台地の東側頂部東端に立地し、3号塚に隣接する群中最大の隅丸方形塚である。南北8.8m、東西10.2m、高さ1.3mの規模を有している。北東辺の計測では、主軸はN-37°-Wを示し、西偏する。

北東・南東辺では裾部の直線が良く残り、隅部もかなり角度の強い弧状に成形されている。これに対し、南西辺では裾部の中央が張り出した半円状となり、隅部は辺と一体化する。北西辺では直線を意識しながらも、中央部が鎌の手状に変形を受ける。頂上部は方形を呈しているが、後世に擾乱が入り封土の一部を削平しており、このため最高所は西側に移動している。この時の排土は北東辺中央部分に移動させたためか、こ



第7図 3号墳



#### 4号塚土層説明

- 1層 暗褐色土 積根の旁に入り込んだ表土層  
 2層 利色土 烧土粒子・ソフトローム小ブロック少量含む盛土層  
 3層 暗褐色土 ソフトロームブロック多量含む盛土層  
 4層 褐色土 ソフトロームブロック中量、黒褐色上ブロック多量含む盛土層  
 5層 褐色土 ソフトロームブロック多量含む盛土層  
 6層 暗褐色土 菊褐色土・焼土粒子・ソフトローム小ブロック少量含む盛土層  
 7層 黒褐色土 黒褐色小ブロックを主体とした盛土層

- 8層 暗褐色土 ロームブロック少～中量含んだ盛土層  
 9層 褐色土 黒褐色小ブロックを主体とした盛土層  
 10層 暗褐色土 流土粒子少量、暗褐色土・黒褐色土小ブロックの等質に混じった盛土層

□ — 暗褐色土主体土層

■ — 暗褐色土主体土層

■ — 黑褐色土主体土層

0 4 m  
(1 : 120)

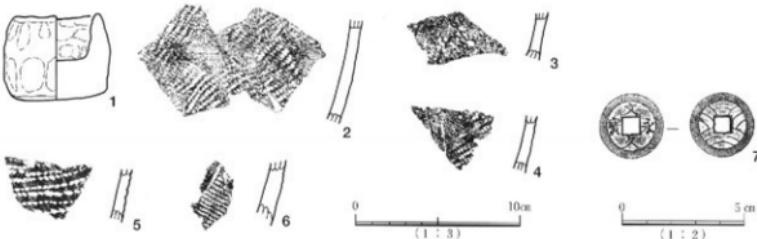
第8図 4号塚

の部分の等高線に異常な張り出しが認められる。塚の南西側中段にも擾乱による変形が認められ、等高線が部分的に突出している。塚の中腹には段が設けられていない。周溝は認められず、周囲には広い平坦面が広がっているのみである。

塚の頂部を通り、各辺に直交する軸線を設定して封土層の観察を行った。本塚も大型塚のため、地山上に9層の土層を盛り上げて構築している。地山のローム層は台地の傾斜に平行するG-G'方向では北西方に緩やかに傾斜し、直交するH-H'方向では多少の凹凸は認められるものの、平坦面を作り出す。基盤層は旧表土を利用した第10層である。この層は台地の稜線部にあたる北東部分がかなり厚く、斜面側の南西部分が薄くなっているが、この状態が自然のままとは考えられず、やはり一度移動したものを再度盛り上げた結果このようになったものと考えられる。同層はかなりの硬度を有している。基盤層直上の第9層は褐色土と暗褐色土の混土層となり、さらに塚の下部にあたる第5~9層が逆勾配状態の盛り土となっている。ただし、この逆勾配状態は上層断面図で見る限りG' と H' 方向、即ち塚の北と東側部分において顕著であり、他では一部に見られるのみである。本塚においては少なくとも全周からの逆勾配状態の土層の成形を意図してはいなかったようである。これより上方はほぼ水平の上層堆積となる。また、焼土粒子は第2・6・10層に認められる。特に第6層中のものは、塚の高さの1/2、ほぼ中心となる上層中であり、3号塚との類似点も多い。第10層中の焼土粒子は最下層の基盤構築時に混入されたものと考えられよう。

#### 出土遺物

1~4号塚から出土した遺物は、縄文土器・土師器27点、手握土器1点、銅鏡1点である。いずれも封土中に混入した遺物であるが、4号塚表土から出土した銅鏡は塚の構築時期を考える上で参考になる遺物である。



第9図 1・4号塚出土遺物

表1 出土遺物観察表

出土遺物	番号	種別	器種	器形・技法及び文様の特徴		胎土		色調	備考			
				外面オサエ、内面指頭圧痕	白色微砂粒多量	砂粒多量	褐色					
1号塚	1	手握土器	鉢	外面オサエ、内面指頭圧痕	白色微砂粒多量	褐色						
1号塚	2	縄文土器	深鉢	胴部下半破片、單節LR施文	砂粒多量	暗褐色	浮島式					
1号塚	3	縄文土器	深鉢	底部直上の破片、文様不明	砂粒多量	褐色	浮島式カ					
1号塚	4	縄文土器	深鉢	胴部破片、單節LR施文	砂粒多量	暗褐色	浮島式					
1号塚	5	縄文土器	深鉢	胴部上半破片、変形爪形文	砂粒多量	褐色	浮島2~3式					
4号塚	6	縄文土器	深鉢	胴部細片、陰帯による区画内に單節RL施文	砂粒	橙色	中期中葉カ					
出土遺物	番号	種別	面 cm		背 cm		輪厚 cm	肌厚 cm	重量 g			
			輪外径	輪内径	郭外径	郭内径						
4号塚	7	文久永寶	2.8	2.0	0.9	0.6	1.9	0.6	0.2	0.1	3.5	一文錢

## VI まとめ

今回の発掘調査は山崎古墳群として周知されていた4基の古墳を対象として実施し、調査の結果、4基はいずれも後世の塚であることが判明した。以下この塚群について簡単にまとめていきたい。

### 塚の立地

まず、塚群は沼里川を見下ろす馬背状台地の尾根上に構築されるという特徴を有している。この尾根上は良くあるように旧道として利用されており、その旧道の傍らに並べて構築されるという特徴も併せて持つ。これは関東地方の中・近世の塚群に良く見られる現象であり、街道を行く旅行者や物流関係者から信仰の対象として視認できること、逐次基数を増加させることにより、信仰がより強固に継続されていることを体現したものと考えられる。

さらに、構築地点は沼里川から進入する小谷津の谷頭ともなっており、この谷頭を挟むように2基ずつの塚が構築されている。小谷津には下の沼里川筋の集落から尾根上へと直登する農道が作られており、この農道からも視認できることを意図していたものなのかもしれない。

### 塚の平面形と規模、方位

塚は4基とも隅丸方形に形成されている。3号塚のように南西部が半円状に崩れた形態をとるものもあるが、いずれも旧道に面した側は隅部の角と辺部の直線を意識して構築しており、北東面ではきれいな四角錐台の封土を見ることができる。古墳との差違は塚の頂部に広い平坦面をとっていることである。

また、塚は1号から4号へと順に大きくなり、規模的には一辺が1号6.0m(3.3間)、2号7.3m(4.0間)、3号8.3m(4.6間)、4号10.2m(5.6間)という値をとる。新旧関係を除外すれば、1~3号までは一辺の長さを約0.5間増し、4号のみが1.0間増しということになる。のことから塚の規模はある基準によって設計されており、無作為に構築がなされたものではないということが判明する。これは塚の主軸線設定においても同様であり、4基の塚の主軸はN-32°-WからN-41°-Wの間に収まっている。塚の主軸を北西方向に設定するという原理が働いている証拠であり、塚の方位についても設計の範疇に含まれていたものと考えられる。

### 塚の構築法

塚を構築するにあたって、まず旧表土層を取り去ってから、堅固な基盤層を構築している。基盤層には焼土の混入が認められ、構築前の整地時に地表の草木の焼き払いを行った可能性がある。

塚の構築法には2つの工法がある。1は盛り土を水平に積み上げ、その上部を全体的に土層で覆う、薄皮慢頭法とでもいうような工法である。2は下段の盛り土を逆勾配状態に積み上げ、その内部に土層を水平に積み上げて行く、すり鉢法とでもいうような工法である。ただし、この工法が統一的に行われない場合もあり、4号塚ではすり鉢法が全周に行われず、一部分欠落する。

封土は褐色土と暗褐色土が互層状態に積み上げられている。これは単一土層を積み上げる場合に比べて強度が増し、また、排水面でも効果的なためであると考えられる。

封土中の焼土粒子は塚の基盤面と中段以下の部分で濃密に確認された。特に中段以下の場合には塚の中心部分の位置に分布するという特徴を有している。基盤面のものは草木の焼き払いの結果とも思われるが、封土中段、中心部の焼土粒子は何らかの意図で意識的に散布されたものと想像された。しかし、盛り上げ途上に中心部分で火を焚いたという所見は得られず、外部で生成した焼土を散布した可能性が高い。

### 塚の新旧関係と構築時期

塚の構築時期が決定できる資料は出土しなかった。4号塚発見の文久永寶も表土層中からの出土であり、塚の構築時期とは関係が浅いものと判断できる。この古銭資料からでは最大限遡りうるのは古銭初鑄1863年の段階であり、同年には4号塚が存在していたことが裏付けられるのみである。現地には明治期以降に構築されたとの伝承も残されていないため、江戸時代以前の中・近世のある段階に構築されたものと推定するのみである。

塚の構築法から見ると、1・2号塚が薄皮工法であり、3・4号塚がすり鉢工法となる。したがって、4基の塚は2基ずつ別の時期に構築されたものと考えられる。塚の所在する尾根が小谷津によって南北2つの最高所に分けられ、その北頂部に1・2号が、南側頂部に3・4号が構築されていることも時期的な意味を暗示させるものである。しかし、4基が同一の主軸方向をとること、一辯の長さが一定の基準によって律せられていることを含めて考えると、それほど時間的な差を持たずに南北の2群が構築された可能性も否定できない。

以上のような諸点から、本塚群は南側の4・3号塚から2・1号塚へと築かれ、最終段階の1・2号塚が構築されたのが江戸時代末期からそう隔たってはいない時期と想像される。

### 参考文献

- 江戸崎町教育委員会 1993 「江戸崎町史」
- 大場翁雄 1967 「歴史時代における「塚」の考古学的考察」『末永先生古稀記念 古代学論叢』
- 赤石光資 1987 「塚の一考察」『埼玉考古』第23号
- 我孫子市中峰一号墳発掘調査会 1982 「中峰庚申塚」
- 聖人塚遺跡調査会 1987 「聖人塚遺跡」
- 財團法人茨城県教育財団 1991 「二の宮貝塚・大日山古墳群・恩川遺跡－一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書－」茨城県教育財團文化財調査報告第65集
- 江戸崎町教育委員会 2000 「姫宮古墳群1・2号墳 水神峰古墳」
- 江戸崎町教育委員会 2001 「橋の台古墳群第2・3次発掘調査報告書」

# 写 真 図 版

圖版  
1



1·2·3号壕全景



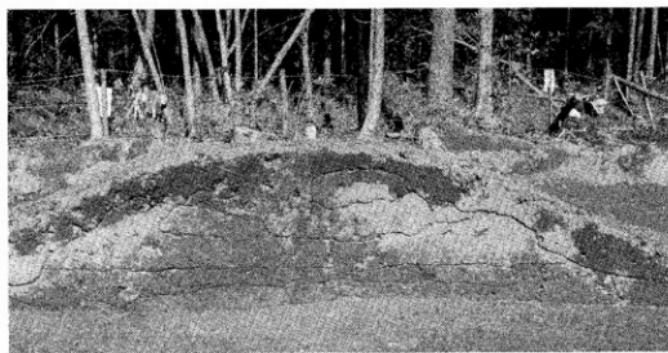
1·2·3号壕土層断面



1号塚調査前現況



1号塚土層断面（1）

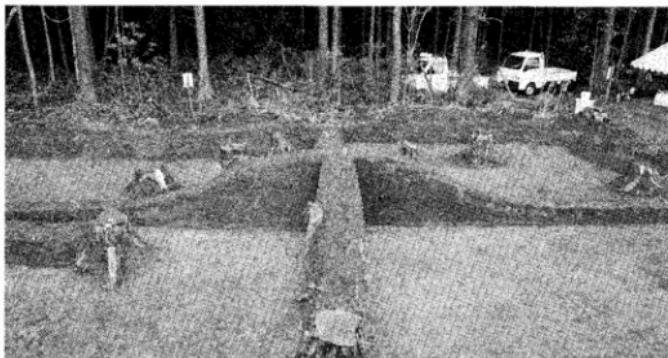


1号塚土層断面（2）

図版  
3



2号塚調査前現況



2号塚土層断面（1）



2号塚土層断面（2）



3号塚調査前現況



3号塚土層断面（1）

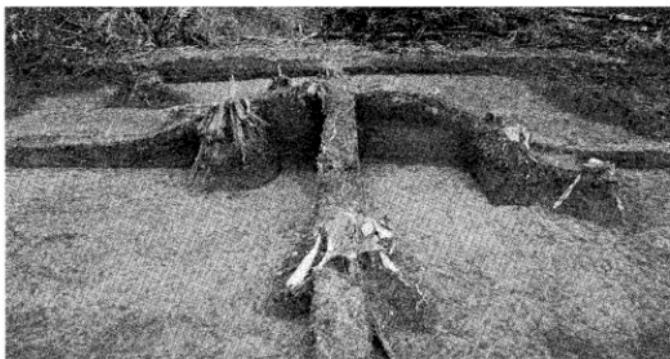


3号塚土層断面（2）

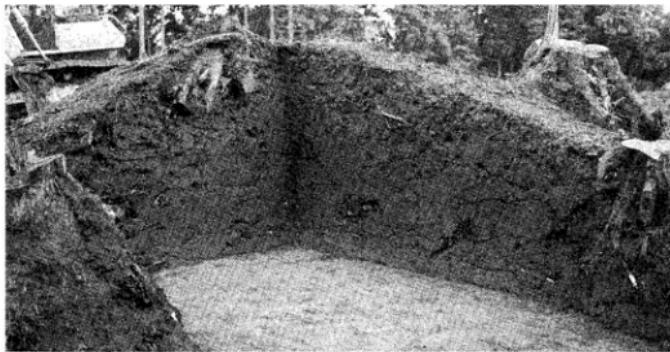
図版  
5



4号塚調査前現況



4号塚土層断面（1）



4号塚土層断面（2）

## 抄 錄

ふりがな	やまざきつかぐん						
書名	山崎塚群						
編著者名	平岡和夫 間宮正光						
編集・発行機関	山崎遺跡調査団/〒286-0045 千葉県成田市並木町221 0476(24)0536 江戸崎町教育委員会/〒300-0504 茨城県稲敷郡江戸崎町大字江戸崎甲2148-2 029(892)4110						
発行年月日	西暦2004年10月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 下	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
やまざきつかぐん 山崎塚群	茨城県稲敷郡 江戸崎町大字 蒲ヶ山字山崎 174-1	08440 町 161 57分 33秒	35度 140度 17分 0秒	20010820 20010927	2,125m <sup>2</sup>		土砂採取事業
所 収 遺 跡	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			
山崎塚群	塚	近世	塚 4基	縄文式土器 土師器 古銭			

## 山 崎 塚 群

印刷 平成16年10月25日

発行 平成16年10月28日

編集・発行 山崎遺跡調査団

江戸崎町教育委員会

印 刷 株式会社 文化総合企画

千葉県富里市日吉台1-23-12

TEL 0476-93-0593